

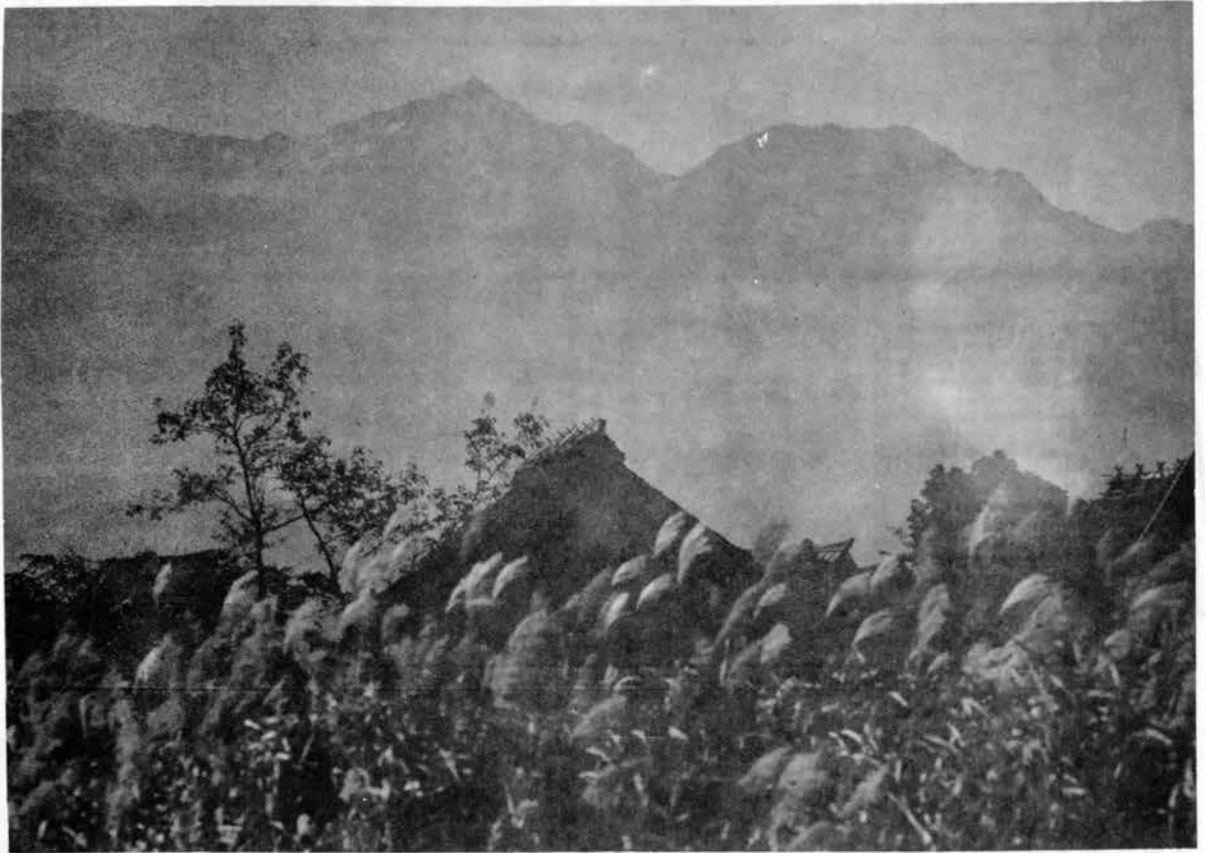
# 山と博物館

第17巻

第10号

1972年10月25日

大町山岳博物館



白馬山麓の秋

撮影 山本博幸

## 里山と農業

農家と耕作地が展開する平坦地の周辺は、いわゆる里山と呼ばれる山域であり、この里山は、農業の長い歴史とともに生きてきた。

農家にとって里山の下草や落葉は有機肥料としての堆肥となり、時には青葉のついたままの小枝を、直接水田に踏み込んで肥料とする。刈敷の材料として利用されてきた。切り倒された幹や枝は、薪やしば、あるいは炭となつて暖房や炊事用の燃料となり、その結果つくられた木灰は、無機肥料として畑や水田に供給された。

こうして、農作物のもつとも養分含有量の多い部分を取獲する農業の形式では、農地から絶えずうばわれる有機・無機養分を、里山から取り入れることによって農地の生産力を維持してきた。もちろん住み家の建築用材や補修材料、農機具の木質部もこの里山から採取されたが、こうした直接的な効用のほか、山崩れや水害などの災害の防止、飲用水や灌漑用水の水源涵養林としての機能など、里山の間接的な効用も忘れてはならない。

ところで、GNPのかけ声と並行し、農業はほとんどが化学肥料にたよるようになった。さらに燃料革命によって、電気や化石燃料が薪や炭に代えられ、かつて見られた農業と里山とのつながりはほとんど断ち切られてしまった。やがて、観光地や別荘地の造成など開発の波がこの里山におし寄せ、北ア山麓でも大企業による土地買占めや造成は目を追って激しさを増している。

里山と結びつかない農業の形式が、果して永続性のある生産を保証するものであろうか。直接的な関係が無くなったといって、目先の経済だけを目的とした安易な里山のあけ渡しを行うことは、住み家の保安や水源確保の上で、絶望的な未来を約束することにならないだろうか。

(平林国男)

# 登山用具の変遷 (1)

## 西岡一雄

頼山陽の紀行文の中に村民が「山中何の好看かある」と不思議がったとある。ウエストン氏にも「日本アルプスの登山と深検」に「銀も水晶も出ぬ山に、何のためおもしろがって登るのか」という一句があった。多くの邦人は当時全くそういう考えであったし、またそういう考え方で登山の芽はのびない、むしろ技術も用具もあつた筈がない。

ところが、明治二十七年になって、かの有名な志賀重昂先生の「日本風景論」が出た。この風景論こそ日本の山々を照らす曙光として祝福されるべきものであつた。それまでの日本は外人と一群の学者の登山であつた。しかも、この書が出版された前後から漸く講中の登山から脱けて、自由な新興登山へと移ってゆくわづかながら新人が出始めていた。木暮理太郎、小島鳥水、志村鳥嶺、そういう人達が針ノ木峠から立山へ、あるいは槍ヶ岳・白馬岳へと登山するようになった。

### 明治時代の登山風俗

明治四十年頃南アルプスに入ったときの姿である。——「山岳」より



山へ、より峻しい遠い山へと、奔放なスポーツ的登山へと移行していったが、依然として草鞋の紐を結び足袋と脚絆とを身につけて靴には用がなかった。洋服は着たが、登山服という特別なものは未だ無かつた。きもの裾を端折って生草蓑を羽織るを常としていた。小島さんさえ、きもの利点を自著にかきこしている。

登山は専ら夏のことであつたから、シャツは被ったけれども、カンカン帽で済んでいた。右肩から斜に左脇下にかけて雑糞。多分蝙蝠傘は携えたであろう。余裕のある人だけが人夫に毛布を運ばせた。雑糞に詰めきれない物は、小型の柳行李に入れて担がせた。まだルックザックという便利な袋はその頃なかつたのだ。

——「金剛杖」より



——「金剛杖」より

ば、足拵えの草鞋と雨露を凌ぐ油紙とは登山具中重要な物であつた。そのため草鞋の研究は徹に入り細に入った。

山中には諸々に野陣場というのがあつて、そこは先人の発見に係わるよき宿場であつた。そうした中にも、イギリスの旦那風な豪華な金持の幾人かは別であつた。トナカイの寝袋に眠り、天幕を担がせ、ハム・ソーセージというあちら風の喰物、そして自分は葉巻をくゆらせて悠々と山へ入つていった。

飯ごうはすであつたけれどもみんなは柳行李(めしこうり)の弁当に梅干を日の丸にしたのを喰つた。人夫は塗物の函弁当を使つた。天幕といつても、それは厚い帆布綿でつくられていたから雨がしむと重さに堪えかねた。しかも、一人二人の少数人数では余り使わず、多人数にのみ限つて使つたらしい。シートも寝袋もない。油紙と生草蓑がこれに代用された。ゴツヘルがないから鍋、釜、飯茶碗まで一括して人夫が担いだ。提灯はあつたけれども山中の露営では、どしどし木をくべて焚いたからその用途はすくなかつた。

さてしかし今はなく昔にのみあつた奇妙な用具として一振りの短刀、一挺の拳銃があつた。

必需品でないまでも用心のため用意した登山者がないでもなかつた

### 大正初期の登山風俗

大正二年、ガイドレスで「槍ヶ岳ヨリ日本海まで」の時の姿。二人ともルックザックをもっている。飯ごうも見える。天幕も持っていた。——「山岳」より

### 大正時代後期



バトミントンスタイルの面影の一部を伝えている。学生たちはこんななりで登山していた。



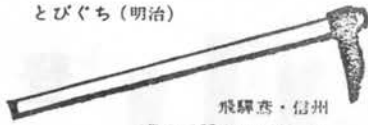
木暮理太郎氏

田部重治氏

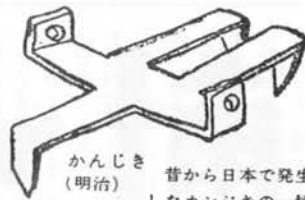
。現に小島さんは明治三十五年槍ヶ岳登山にこれを携え、大平最氏は技術書にこれをのべていた。当時アルプス登山は探検であつたことを思えばうなずけるだろう。志賀さんの本には山に入る半ヶ月人に逢わざることあり、また鳥水氏にも、山は土風火水源始其儘の姿とあるから、不測の災害に備えて一振りの短刀一挺の拳銃が書かれるのも無理はない。

これも夢なら、久米民之助氏夫妻が三十人からの人夫に護られて白山を白川谷に降りていったのも、大正十四年ごろ名古屋の伊藤さんが上ノ岳に山小屋を新設し、太閤さんえなし得なかつた豪華な生活をしてお正月を過ぎたという話も、みな今日では夢物語となつた。ウエストンさんは屢々ハンモックを好んだ。蚤の多い当時の日本の田舎宿ならいたしかたなしとするも、山中こんなものを使つた

とびぐち(明治)



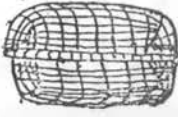
飛騨杵・信州 鷹の二種があった。シャフトは腰以下の短いを用いたが、富士登山の冬山用には長くして使った。



昔から日本で発生したカンジキの一種である。これをワラジの下にがんじがらめにくりつけて穿いた。現在アイゼンと呼ばれている八本爪、十本爪はみな外国からきたものであり、決してこのカンジキから発達したものでない。



めし行季(明治・大正)



人夫・案内人の多くは塗った木箱の弁当箱であったが、これをも使った。中のメシは腐り難く、またお茶をもしばらくは洩らさなかった。

らんとん(大正初期から発生した)

これは三角形であるが四角形のもあり、各々に大小があった。ローソクをさし込むのも置くのも、各面はガラスでなく、マイカ(雲母)であった。登山用ローソクが別に出来た。

ねて「登山の準備」を山岳誌上にかけ、自分であちらからよき登山具を入れたい。その中には、ルックザック、ピッケル、アイゼン、もちろんランタン、コッヘルまで揃っていた。遂に人夫まで、わらじを捨てて地下足袋へと移ってゆ

へと急に展開の曙光がきざしてきた。それにつれ用具の必要性が加わる。世は大正とかわる。いきなり雪中富士登山がスキーによりなされる。水島長次郎という人は、登山用短スキーを考案した。アイゼンの重要性が確認されて、高野式ランポンが発明された。もう和装ではどうにもならない。いやがられた登山靴が不完全ながら草鞋となかばして穿かれるようになってきた。明治四十年、佐藤順一という人が富士山で使った少し長目で幾分撚り気味の鷹口やカンジキの名に於てがんじがなめに草鞋の裏に結び付けたこのカンジキではぬきさしならない。

この言葉は正しい。しかもこんな時に正にあらかたの山嶺はみな踏み尽くされ、お山の貧困が叫ばれていた。そこで登山者は未知の船を求め、より困難なルートを探し冬山

明治大正時代の案内人および人夫の風俗



大正も末期に入つては、全くかえりみる者のなかつた岩登りがまた大いに勃興する。これら精銳の気に満ちた多彩な動きは、従来の登山具ではどうすることもならない。その頃ちようど大阪にマリヤ運動具店、東京に保々近藤商會が興り、神戸に日本貿易商社があつて、それぞれにむこうのよい品々を舶載した

草鞋がついに地下足袋となり、靴とかわる。鉢巻や笠をして、多くはトビコを持った。担いだ荷を、立てたそのトビコに乗せて一服したから、憩うことを一本立てというようになった。

大正十三年の「登高行」に、大島亮吉さんは、「パドミントンスタイル」というのをかいている。これは、当時の一部の登山者の氣質並びに嗜好に巧く投じた。一口に要約すると、洋服も帽子もお爺の古物でよいが、舌、多少古い方がよいのだ。しかし、じつとみている中にも、そのくすんだ地味なものから、おのずと何らかのよさがにじみ出てくる淡い上質の生地と柄をもつものでなければならぬ。そしてピッケルと靴とだけは新しい一流品を持ちたい。パイプを

大正も末期に入つては、全くかえりみる者のなかつた岩登りがまた大いに勃興する。これら精銳の気に満ちた多彩な動きは、従来の登山具ではどうすることもならない。その頃ちようど大阪にマリヤ運動具店、東京に保々近藤商會が興り、神戸に日本貿易商社があつて、それぞれにむこうのよい品々を舶載した

例は他にきかない。月明の暁、満身に霜露をあびて安眠した上高地のその一夜は他にない美しい詩であつただろう。  
外人登山が華やかであつたその頃すでに邦人のある人はピッケルを使つていた。(山崎直方白馬岳にて三十五年)又、自製のルックザックを造つた人もあつた(石川光春、三十七年)。小島・岡野両氏はウエストンの家でロープも登山靴もみて知つた。四十年には辻村太郎さんはピッケルをもち、ルックのスキーで山行している。ハンス・コラーさんのスキーが日本についたのも四十一年であつた。その明くる年には中村・三枝さんがスバリ岳で天幕を張りピッケルを携えていた。四十二年には加賀正太郎氏の帰朝土産に如上の品々が

揃つて持ちかえられた。埃国人クラツツエル氏が富士へスキー登山を試みたのも、石崎光瑠氏等がアルプス式ロープ登山をしたのもこの頃のことであつた。  
しかしながら、一般の登山者がまだ和服で赤立、わらじでは、こんな高級登山具がこなしえないのは無理もなく、スキー技術は芽が出たばかりで岩登りはむしろ邪視した時代とて無理はなからう。つまりピッケルの如きは登山人としての表徴を誇示した伊達であつたのだ。ウエストン氏も、その著書の中でいらないと書いていた。冬山のない明治期としては、この言葉は正しい。しかもこんな時に正にあらかたの山嶺はみな踏み尽くされ、お山の貧困が叫ばれていた。そこで登山者は未知の船を求め、より困難なルートを探し冬山

くのである。浜名、金子という山岳会會員は自らピッケルを打つて領けた。この時分からピッケルは漸く実用性を帯びてくる。  
細引の名に於て武田久吉さんは戸隠山で大平さんは針ノ木峠でこれを明治時代に使つたとあるが、こんな物を用意して登山する者は稀であつたと思う。いわんやロープなどあろう筈がない。それが一先で揃つたのは加賀さんの帰朝以来に始まる。それに接してすぐ高野さんの活動、そして遂に大正十年に至つて名実共に完全に近代登山に即応する登山具が充実したのであつた。

大正十年前後からのことである。新帰朝者横有恒さんがもたらした新しき登山技術、それが如上の登山具輸入と相まって充たされこなされていったのは倅であつた。  
冬山ではウインド・ギャッケ、ツェルト・ザックさえあつた。岩のぼりでは、ロープの外に三つ道具もあつた。シートも寝袋もあつたやがて、登山靴の本格的な物が日本でも造られる。それを穿いて日本人が初めて海外の山へ遠征する。輝かしい大正十年であつた。  
三本爪のカンジキが五本爪となり、八本、十本となつてゆく。アルマーゲル、フリッツエルクシモンのピッケルがシエンク、ペンドヘスラ、ウイリッシュと、あらゆる名水斧がそろふ。イギリスからアーサビル、スイスからセクリータスとロープがつく。ランタンコッヘルがあつたから、野営は天幕の中で陽気に且つ愉快にいとなまれた。その上に、天幕またはツェルト・ザック及び寝袋とシートの併用は欲するところで眠りが折れたから一日の行程が遠くへのびた。尻を端折り草鞋で苔を踏んで歩いた登山とは格段の違いが山にも登山者の姿にもみられた(大正後期)。そのかわりに不幸な遭難が重なるのもやむをえなかつた。

# 登山道の昆虫 (3)

## 輿水太仲

### ◎セミ

登山の道々低山帯から亜高山帯にわたり高木林を抜けるまでは、多くのセミの声を聞くが、高山帯に入るとそれもめっきり減る。腰を下して一汗ぬぐう時、時ならぬかん高いジーと鳴く声を耳にする時、ふつと自分のいる位置の高さに錯覚を起す事があるが、このセミこそ日本のセミ仲間の美蟬？高山特有のコエゾセミである。アルプス山系では海拔七〇〇メートルあたりから、三〇〇〇メートルに及ぶところにわたってこの鳴声を聞くセミで、分類上は〇〇型と十一の型に分けられている。およそ普通セミと言え、大木につかまって鳴くものと思われているが、三〇〇〇メートルの高所には大木もないので、ハイマツや、高山植物の草むら、岩はだど、ところ選ばず止まる。時には地上でさえ鳴く。それだけに小さな振動にもよく感じ、人が近寄ると、す早く身の危険を察し鳴き止むかとび立つてしまう。とび立つ時、ジ・ジ・ジ・ジ……と短く鳴きながら



石上のバッタの群



タカネヒナバッタ

ぶ特性がある。亜高山帯にも棲むが主としてミズナラ、ハンノキ、等に止まることが多く止まる時大いには下向きに止まる変った習性を持つのが、このエゾセミの仲間である。

### ◎バッタ

六、七月頃、ススキの生える高原調のあたりで、ジャジャジャと鳴くのは、バッタの親類すじに当るナキイナゴで、これにまじって弱い音でシユルルルと鳴くのはヒロバヒナバッタである。これらは六、七〇〇メートルまでのところに棲む。直翅目昆虫に属するが直翅とは翅がまつすぐのことを意味し、バッタとは飛び立つ時の音、つまりパタパタすると言う意味のものらしいが、パタパタする程のものまでもなく一般に活動は敏捷なものが多い。全体の型と云い、顔かたちと云い、特にシヨウリヨウバッタなどは誠に溫和しいかつこうで、外敵に対する防衛手段としては、後脚を自らちぎり落してにげるか、口から茶褐色の汁を出すかの方法しか持ち合わせない愛すべ

き昆虫である。

一五〇〇メートルまで登るとヒナバッタが現われる。この種類は、満州、シベリア、ヨーロッパの各地に広く棲むものである。二〇〇〇メートルになり、更に高く二五〇〇メートルに達すると、クモマヒナバッタが棲むようになるが、これは雄も雌も短い翅で、見るからに高山の住人と言ったところである。

フキバッタの仲間はいくつかの種類があり大体は山地性のもので、かなり高い所にまで棲んでいるものもある。翅が短く何時見ても成虫ではないように見えるミヤマフキバッタは、元来野生の植物であるフキの葉に多く見られ、その葉を食べるが故につけられた名前であろうが、時として大群が発生し、その時にはフキの葉のみ食っているわけにはいかず手当り次第に何の葉でも食う。そんな時木の葉も草の葉脈ばかりになった景観を見受けることがある。

何の虫けら……と人は言うが、この虫けらが登山の道々に、いたるところに、様々な生活様式で生活しているのだから、種によって平地から山地、山地から高山にと広い範囲にわたるものと、極めて極地に限られるものといろいろあり、種によっては大量に発生するものと、ごく少数しか発生しないものと様々ある。こうしたことが時たままた高山に限られた時、それは高山性昆虫と言われ、普通種と言われ、珍種と言われるのであるが、自然の中では一匹の虫をとってみても、只漫然と生まれ、たわいもないその生涯を終えているとは思われない。言えは生物生存の法則に従って、それぞれの虫がそれぞれに生活して、相互に複雑な関係を保ちつつ生き続けて、それが又自然を構成する要素となつていのである。登山の味……それは山の景観にふれると同時に一花に止る虫、一葉を食べる小さい生命を持つ虫にも味わっていたきたいと願うものである。(完)

(前ページより)  
それればなおしつくりする。以後この流れは長らく尾をひき、岳人の好みに投じた。

明治時代の登山は専ら猟師又は漁夫に頼ったから、もし目ざした其者が不在であつたら帰るまで幾日も待たねばならなかった。地図もない当時一人では山へ入れなかつたからそれが大正に入つて四、五年になると、登山組合が信州大町の対山館の主人のおつやんによつて結ばれ、猟のない時は、いつでも客の求めに応じてつても案内人を伴うことが出来るようになったのである。

その猟師を小島さんはこう書き残している(導者二人……二人共に山稼ぎ用の筒袖甲斐々々しく、脇より手首へかけては盲縞の手甲を蒙り、股引と袴とを折衷したるような例の猿袴を穿ち、この辺の山地に常用せらるる蒲にて編みたる脚絆を着け、機皮を剥いで實際よく綴り合せてたる長方形の袋は、行厨箱、草鞋、缶詰その他の食糧品を詰め込み、鍋をその口に冠せて、其上を又麻縄にて十字字に括りたるを繋ぎ背負い、腰には山刀に半鞘をあてがいたるを横たえたるが……)

昭和十年頃になると、よれよれの中折帽をかぶり色あせたチヨッキと長ズボン、どちらもみな上質のスコッチ。(大方ひいきの客の古物をもらつたとしか思えない)登山靴を穿き、片手に銘の刻んだピッケルを携えて屯していたから、場合によつてはどちらが客やら導者やら見境がつけられぬ者もいた。

(次号へ続く)

山と博物館 第17巻 第10号  
一九七二年十月二十五日発行  
発行所 長野県大町市TEL.026-2211  
印刷所 大町市下仲町山と博物館  
定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野)三三、二九三